

【研究室紹介】

家庭科教員をめざす学生とともに

前田 亜紀子

群馬大学 教育学部 家政教育講座

1. はじめに

東日本大震災のあった2011年10月に赴任し、翌年から研究室を展開した。現在指導中の4年生、院生を足しても両手が埋まらない。将来、教師希望の学生の目標は教員採用試験合格である。研究に身を投じる時間は短い、非常にまじめに取り組む。研究の一端を紹介する。

2. 研究テーマ

私は修士から透湿性防水素材による雨具について研究している。透湿性は家庭科の教科書でも取り上げられる高機能素材だが、学生の多くは着用経験がない。被服衛生学の講義後、尾瀬の野外体験活動に行く学生に希望があれば貸し出す。すると比較着用したわけではないが、その着心地のよさに驚いて帰ってくる。まとまったデータが得られないか思案中である。

群馬は「かかあ、雷、風」の3K風土で有名な土地柄である。前傾姿勢で移動しながら、風研究に着手した。空っ風の吹く冬季の着衣を画像撮影し解析した。着衣量研究は本部会でも盛んである。伊藤紀子先生を代表とした研究チームによる大規模な全国調査(2002~2004年科研費 no. 14380037)や、田村照子先生の御著書『衣服と気候』(2013)はバイブルである。

各種衣類の着用率を捉える上で、気温および風冷指数(WCI)は有効であり、強風時特有の着用の工夫や性差が見出された(2013年度井上桃香卒論、2014年度群大紀要)。続けて、內衣類と組成表示のタグをメール添付画像で送信させる手法により協力を得て解析した。外気温の低下に伴い、下着の着用率が増加し、それら素材の多くが化学繊維であった。35~38年前の衣服重量、clo値と比較して、現在の若者は、軽くて暖かい衣服を着用しており、耐寒能にも影響を及ぼしている可能性が示唆された(2014年度梶山まどか卒論、12thICPA2015 幕張大会にて一部を前田が発表)。

当ゼミの前身は被服材料・整理系であったため、人体生理や感覚の測定機器は少なく、人工気候室はない。実践女子大学や先輩方に場所や機材、マンパワーまでも頼ってきたが、理科や保健体育、技術をはじめ、医学、理工学部などに自ら交渉、開拓に行かねばと思う今日この頃である。

インクルーシブ教育が広がっている。障害児支援ボランティアをしてきた学生の修論を指導することになった。障害児の自立と社会参加には、様々な生活活動上の基礎的スキルが役立つ。衣生活上の課題を見出し、支援につなげることを目的に調査している(2015年度高麗千秋修論予定、2015年夏季セミナー研究紹介にて一部を前田が発表)。

3. 今後も

医、理工、社会情報の他学部生に衣環境学の授業をしている。何気なく身に纏っている被服が環境の一つであることを伝える。2014年世界遺産に登録された富岡製糸場は、群馬県に絹という優れた繊維素材があることを知る格好の教材である。学生各々の専門領域が融合し、思いもよらない発想が生まれる可能性を秘めている。

場所や環境は変わっても、被服に関する研究テーマが満ちていると感じる。被服を着る主体がヒトである以上、年齢、性別、多様な状況に対応する安全なものではなければならない。また、被服の概念は広義にわたり、文化や共生をキーワードに教育・研究だけでなく、地域・社会に還元できることも大きい。それらは国内に限ったことではない。常に俯瞰的、客観的なものの見方ができなければならないことを痛感する。

<連絡先>

〒371-0027 群馬県前橋市荒牧町4-2
群馬大学教育学部家政教育講座 前田亜紀子
電話&FAX: 027-220-7344 (研究室直通)
eメール: akikomaeda@gunma-u.ac.jp